

審査結果の要旨

報告番号	甲 第 1212 号	氏名	梅木 陽子
審査担当者	主査	石竹達也	(印)
	副主査	田中芳明	(印)
	副主査	吉田典子	(印)
主論文題目： Serum Albumin and Cerebro-cardiovascular Mortality During a 15-year Study in a Community-based Cohort in Tanushimaru, a Cohort of the Seven Countries Study (血清アルブミンと脳心血管病死の関連—世界7カ国共同研究対象集団(田主丸)において健常人を15年間追跡した結果より—)			

審査結果の要旨 (意見)

本研究は、一般地域住民 40 歳以上の約 2,000 名を対象に、15 年間の長期追跡により、研究開始時の血清アルブミン値が、全死亡と疾患特異的死亡に独立して関連すること、特に血清アルブミン値が高いほど、ハザード比が下がるという新たな知見を証明した。血清アルブミン値を増やすことが、積極的な予防因子となる成果は、栄養学および臨床医学的な意義が大きく、学位論文として高く評価できる。今後の更なる研究展開が期待できる。

論文要旨

低栄養状態は QOL や予後を低下させる要因である。本研究において、血清アルブミン値が全死亡と疾患特異的死亡の独立した危険因子であるのか、一般住民検診受診者の長期追跡調査の結果から関連性を検討した。

1999 年に福岡県久留米市田主丸町で実施した住民検診の参加者で、40 歳以上の 1,905 名(男性 783 名、女性 1,122 名)を対象とし、15 年間の死因を調査した。ベースライン時の血清アルブミン値を 4 分位にわけて分析を行った。

ベースライン時の血清アルブミン値は、年齢、BMI、拡張期血圧、HDL-コレステロール、LDL-コレステロール、中性脂肪、eGFR と有意な相関が認められた。これらを調整因子として Cox 比例ハザード分析を行った結果、低アルブミンは全死亡 (HR: 0.39, 95%CI: 0.24-0.65)、癌死 (HR: 0.43, 95%CI: 0.18-0.99)、感染症による死亡 (HR: 0.21, 95%CI: 0.06-0.73)、脳血管疾患死 (HR: 0.19, 95%CI: 0.06-0.63) の独立した予測因子であった。また、最低四分位群に対する最高四分位群の全死亡と脳血管疾患死の交絡因子で調整後のハザード比は、それぞれ 0.59 (0.39-0.88)、0.15 (0.03-0.66) であった。

健康な一般住民において、血清アルブミン値レベルは将来の総死亡と疾患別死亡の予測因子であることが示唆された。